

# 令和4（2022）年度 栃木県アライグマ・ハクビシン防除実施計画 モニタリング結果報告書の概要

## 捕獲数と捕獲の分布

### 1 捕獲数

#### (1) アライグマ

令和4（2022）年度の捕獲数は416頭であった。

狩猟による捕獲は5頭であった。

【有害鳥獣捕獲】416頭（令和3（2021）年度：263頭）

【狩 猟】 5頭（令和3（2021）年度：24頭）

【学 術 捕 獲】 0頭（令和3（2021）年度：0頭）

【緊 急 捕 獲】 0頭（令和3（2021）年度：4頭）

#### (2) ハクビシン

令和4（2022）年度の捕獲数は715頭であった。

狩猟による捕獲は16頭であった。

【有害鳥獣捕獲】715頭（令和3（2021）年度：684頭）

【狩 猟】 16頭（令和3（2021）年度：42頭）

【学 術 捕 獲】 0頭（令和3（2021）年度：0頭）

### 2 捕獲の分布

#### (1) アライグマ

令和4（2022）年度は、県南部の栃木市、小山市、佐野市、野木町及び県央部の宇都宮市周辺において、比較的捕獲の多い区画が散在していた。

#### (2) ハクビシン

令和4（2022）年度に捕獲のあった区画は、県北部及び北西部の山岳地を除き広く分布していた。

10頭以上捕獲されている区画は宇都宮市などの県央部から足利市などの県南西部にかけ多く分布していた。

## 捕獲の実施状況

令和4（2022）年度のアライグマの捕獲効率（100倍値）（捕獲数÷延べわな稼働日数×100）は0.11で、令和3（2021）年度から大きな変化はなかった。

また、令和4（2022）年度のアライグマの捕獲効率は0.35で、アライグマの3倍近い値を示していた。

止め刺し用具を配備しているのは25市町中9市町で、うち8市町で電気止め刺し器を配備しており、1市町は炭酸ガスを配備している。

捕獲と止め刺しの実施者については市町ごとに体制が異なっており、最も多かったのは被害を受けている農業者等が捕獲から止め刺しまでを行う体制（22市町）であった。

## 生息確認地点

アライグマは、令和 4 (2022) 年度の生息確認区画は 69 区画で、県南地域に連続して分布していた。

平成 25(2013)年度から令和 4 (2022)年度の期間では県北部の拡大が認められるとともに、県央、県南西部及び県南東で区画の連続している地域が増えてきた。

ハクビシンは、令和 4 (2022)年度の生息確認区画は 171 区画で、北部及び北西部の山岳地を除き広く分布していた。

## 被害の発生状況

アライグマによる農作物被害は、平成 25 (2013) 年度から毎年被害報告が出はじめ、令和 4 (2022) 年度は小山市での被害が最も大きく、果樹及び野菜の被害が報告されている。

ハクビシンによる農作物被害は、令和 4 (2022) 年度は約 28 百万円と前年度より増加した。農作物別でみると、令和 4 (2022) 年度は野菜が最も多く、次いで果樹類となった。

## 被害対策

アライグマ、ハクビシン対策の普及啓発として、アライグマ・ハクビシン等中型動物判別マニュアルを作成し、各市町に配布するとともに、市町や鳥獣管理士等に対して平成 27(2015)年度からアライグマの防除について研修会を開催している。

また、県内市町において小型箱わなの貸出しを行っている。

## 総合評価

### 1 捕獲数と捕獲の分布

アライグマの捕獲数は平成 22(2010)年度以降横ばいだったが、令和元(2019)年度から急激に増加している。ハクビシンの捕獲数は、平成 28(2016)年度以降増加傾向を示しており、両種ともに生息数・分布が増加・拡大していると考えられる。

今後さらに捕獲の推進を図る必要があることから、農業者等が捕獲した場合の止め刺しの負担を軽減するため、市町において適切な方法で止め刺しが行える体制の整備を推進していく必要がある。

### 2 被害の発生状況

両種とも、果樹・野菜などの農作物への被害が発生している。

なお、アライグマ、ハクビシン、その他の中型哺乳類との区別がついていない可能性があるため、アライグマ・ハクビシン等中型動物判別マニュアルの配布により、加害種の正確な判別ができるよう促していく必要がある。

また、アライグマについては、生態系被害が発生する恐れがある。

### 3 被害対策

アライグマ、ハクビシンによる被害の急増も懸念されるため、捕獲の推進と併せて、被害防護や収穫残渣や生ゴミの処理など、捕獲以外の適切な対策についての普及啓発が不可欠である。